

近代日本におけるハイマート（郷土/故郷）概念の
基礎的考察～ドイツとの関係から

依岡隆児

Das grundsätzliche Studium über den Begriff „Heimat“ im
modernen Japan—in dem Zusammenhang mit dem
deutschsprachigen Ländern—

Ryuji YORIOKA

Abstract

Im Folgenden wird der Begriff „Heimat“ im modernen Japan in dem Zusammenhang mit den deutschsprachigen Ländern behandelt. Indem ich versuche, die vielflächliche Struktur dieses Begriffs klar zu machen, soll dieses Studium nicht nur der anderen akademischen Disziplinen Heimatkunde und Volkskunde, sondern auch Regional Studies in den einzelnen Regionen dienen.

Der Begriff „Heimat“ ist von der deutschen Heimatkunst (Heimatliteratur) oder Heimatkunde stark beeinflusst worden, die die nationalistische Tendenz eingeschlossen hat. Zum Beispiel

haben manche Schriftsteller Sympathie mit diesen deutschen Heimatbegriff gehegt, weil sie glaubten, dass sie selbst ohne Bodenständigkeit in der Moderne stehen und sich nach den festen Grund der „Heimat“ sehnen müssen, was aber zu der nazistischen Ideologie „Blut und Boden“ führte. Andererseits trat die sogenannte heimatlose Literatur auf, die ursprünglich keine Heimat hat. Und weiter schreiben die neue Dichter zur Zeit Diaspora Literatur, die in dem Heimatlosen positive und produktive Möglichkeiten finden kann.

Unter diesem Gesichtspunkt sollen hier erstens die Definition des Begriffs „Heimat“, nächstens die Heimatkunst, die Heimatkunde und die Heimerziehung in Bezug mit den deutschen Ländern und letztens die gegenwärtige heimatlose oder Diaspora Literatur erläutert werden.

はじめに

近年の「地方」分権の流れか、文学、民俗学、社会学、歴史学などのさまざまな分野で、「郷土」や「地方」「地域」という言葉が論じられている。高校・大学や地方自治体でも地域研究や「東北学」のような地方学・郷土学を推進するケースも決してめずらしいことではない。文学や民俗学、歴史学で「郷土」や「地方」、「地域」がテーマ化され、¹在日作家や多言語作家などのディアスポラやエグザイルという言葉で現代文学をとらえなおす試みも多い。こうした議論の展開のなかで、その核となる「ハイマート（郷土/故郷）」という概念

¹ たとえば、『國文学』第53巻第10号の2008年7月号は「地方の文学」が特集とされている。また「故郷」や「郷土」を表題にした本（渡辺一民『故郷論』、筑摩書房、1992年、「郷土」研究会編『郷土—表象と実践』嵯峨野書房、2003年 など）が出ている。参考、『郷土—表象と実践』では、「郷土」という概念について、近代国民国家形成と連動して作られたものであるにもかかわらず「自然」にそこにあるものと考えられることと、このプロセスを稼働させる装置的枠組みの影響範囲を考察することを目的とし、郷土研究や郷土教育を取り上げている。

が多義的で、物理的・地理的空間なのか、主観的な想像の産物なのか、あるいはその両方なのか、ということが必ずしも判然とはしない。そこで、ここでは「郷土」概念を近代以降もっとも日本にこの方面で影響を与えたと思われるドイツとの関連で考察し、概念の重層的な構造を明らかにして、今後の研究の基礎としたいと思う。特に、地元・徳島での地域研究・郷土研究へ日独関係の観点から参考になれば幸いである。同時にまた、国際日本文化研究センターの共同研究会「東アジアにおける知的システムの近代的再編成」に対する貢献としたい。

まず、ハイマート（郷土/故郷）概念と対立する概念を並べてみると、

- ① 「近代」に対して：対近代の関連で故郷は伝統に組するが、近代国家形成との関連も有する。すなわち、戦前は国家アイデンティティの核として要請されていた。
- ② 「都市」に対して：都市文明の反動として「故郷」がクローズアップされて、それと関連して、観念・精神に対して身体・魂の領域に入れられた。
- ③ 「異郷」に対して：グローバル化の中では、ハイマートロスやディアスポラ、エグザイルという、移動に注目したあり方が文化的創造性と結びつけられる傾向がある。

となるが、これらの近代、都市、異郷との対立関係は、実は必ずしも対立しているものではない。フロイトが「不気味なもの」を分析したとき、heimlichとunheimlichという本来対立する概念が深層においては通じているということを証明してみせたように、²馴染みのあるものこそが不気味なのであり、この他者性と自己性の共同出自を受け入れることが新しい共同体のヒントになるはずである。「ハイマート」概念についていえば、近代化は必ずしも伝統（故郷）と無縁ではなく、むしろ近代化の過程で伝統が要請され、作り出されたのであり、ハイマートは都市化・文明化を経て初めて発現するものでもあり、かつ、人間のアイデンティティのよりどころとされる「物語性」を持つ。³つま

² Sigmund Freud: Das Unheimliche. In: Werke aus den Jahren 1917–1929. ホフマン・フロイト『無気味なもの』河出書房、1995年

³ 成田龍一ほか「都市空間と『故郷』」（成田龍一、藤井淑禎、他『故郷の喪失と再生』青弓社、2000年、S. 36。ちなみに、成田はここで、「故郷はアイデンティティと深く結びつき物語性をもつ表象であると同時に政治でもある」（S. 36）として、「故郷」についての3つの点についての考察、「一番目は、

り、それは都市住民の主観のなかにしか存在しないのであり、また故郷は異郷から顧みられるものであり、ハイマートロスという状態が生みだす想像でもある。さらに、ハイマート＝郷土・故郷という概念の、感情に情緒的に訴えかける面が逆に近代化の中で利用されていたこと、つまり、叙情的なるがゆえに政治的だという側面も検討する必要があるだろうし、「消費型ふるさと」⁴と言われる取り換えのきく「ふるさと」の商品化や観光戦略も興味深いテーマである。しかしながら、ここではこうした「ハイマート」をめぐる問題意識を踏まえつつ、特に郷土芸術・郷土文学の日本での移入・定着と、近代日本におけるハイマートロスと文学・芸術の関連をみていきたい。「ハイマート」概念の定着・展開の出発点となったのがこの郷土芸術・郷土文学だったと考えられるからである。

手順としては、第1章で「ハイマート」とその類概念の定義を検討し、第2章で郷土芸術・郷土文学、郷土研究、郷土教育についてドイツとの関連で論じる。その際に、地元徳島の事例を例証として使用する。そして、第3章ではハイマートロス（故郷喪失）というあり方が「ハイマート」を相対化する機縁を

故郷の概念が歴史的に変化してきたということ」(S. 13)「二つ目は、故郷の概念が変化するなか、一人一人の人間にとって、故郷とうものはある手触りをもっているということ。(中略)故郷は人間の存在＝アイデンティティと結びついているということ」(S. 14)、「三つ目は、故郷は、都市、あるいは都市空間と密接に関連をもっているということ」(S. 14)としている。また、「故郷という言葉、故郷という考え方が一般的になるのは近代になってから一九世紀の半ばのことである。先に述べたように、故郷の概念の成立は移動がおこなわれることによって始まる。自分が生まれた場所から移動し、移動した地域で、もと自分がいた地域を振り返るということによって故郷という概念が誕生する。(中略)近代になっての移動の自由とともに人々が一挙に移動するようになり、移動した先で自分が生まれた地域を振りかかってそこを故郷と考えるという行為が開始され、故郷の問題が本格的に開始されることになる。一八八〇年ごろのことである」(S. 14)という。そのうえで、「地域の故郷化とは、いま私がいる場所が本当にふるさとだろうかという問いかけをもち、いま私がいる場所を理想的な故郷に変えてみようという実践をおこなうことである」(S. 32)と主張している。

⁴ 安井真奈美「消費される『ふるさと』」、同書

有しているということを、事例に即して論じていく。

1. 「ハイマート」の定義：「郷土」「故郷」「郷里」「ふるさと」

『広辞苑』第六版では、「郷土」は「①生まれ育った土地、ふるさと。故郷。『一の前輩』 ②その地方。土地。一愛『郷土愛』：生まれ故郷に対する愛情。『郷土玩具』：（大正以降用いられた語）その地方特産の玩具。③『郷土教育』：郷土への愛着と理解を重視し、郷土に具体的な教材を求めて行う教育。ドイツの教育思潮をうけて昭和初期に普及。第二次大戦後は社会科改革のために再び唱えられた。『郷土芸術』：①ある地方に特有の民謡・舞踊・祭礼装飾・建築装飾・玩具・各種工芸品などの総称。②（Heimatkunst ドイツ）1900年頃ドイツで唱道された芸術上の主張。芸術は、その土地・人物・事件を反映するのだからなければならないと考えるもの」⁵とある。

一方、「故郷」は「生まれ育った土地。ふるさと。郷里。平家物語『二度と一に帰りて、妻子を相見むこともありがたし』。『一を懐かしむ』」⁶とある。

また「郷里」は「①むらざと。郷邑。②生まれそだった土地。ふるさと。故郷。『一へ帰る』。『郷里制』：中国の地方自治制度。州県の下の地方区画として、漢や唐では100戸を里とし、里をいくつか集めて郷とした。→郷里制（ごうりせい）」⁷とある。

同じく「ふるさと」は「古里。故郷。①古くなって荒れはてた土地。昔、都などのあった土地。古跡。旧都。万葉集『一の明日香の川に潔身しに行く』②自分が生まれた土地。郷里。こきょう。万葉集『又更にわが一に帰り来むとは』③かつて住んだことのある土地。また、なじみ深い土地。古今集『人はいさ心も知らず一は花ぞ昔の香ににほひける』」⁸とある。

以上の『広辞苑』の「郷土」「故郷」「郷里」「ふるさと」の語を検討してみると、四者には「生まれ育った土地」という点では共通するが、「故郷」「ふるさと」が比較的古くから日本にあった言葉であるのに対して、「郷里」は中国の行政語からきたもので、「郷土」は近代以降の西洋（ドイツ）からの概念の受け皿となった言葉と考えられよう。

「郷土」概念については、たとえば松本博明の「『郷土』とは何か―『故郷』

⁵ 新村出編『広辞苑』第六版、岩波書店、2008年、S.736

⁶ 同書、S.981

⁷ 同書、S.740

⁸ 同書、S.2496

と和解する場」（『國文学』第53巻10号）では、「郷土」と「故郷」をあえて分けている。つまり、「『故郷』は出郷者の側に認識される想念であり、『郷土』は在郷者の属性として認識される想念」とし、さらに「個別個有の記憶としてある『故郷』」と「共同体意識に支えられる『郷土』」である。そして、近代において前者は後者に取り込まれ、共同体的想像に一元化されていったという。⁹ただ、辞書の定義によれば、上にみたように二つの言葉はほぼ同義語であり、もっぱら「土地」「空間」を指している。たしかに「郷土」がより大きな共同体的区分を含意し、「故郷」「ふるさと」が古くから日本にあって主観的で、心理的・感情的な喪失感を属性としているとはいえるが、それも必ずしも明確に使い分けられてきたともいえない。近代西洋化以降については、やはりそこに西洋概念としての「ハイマート」が同様に個別的でもあれば共同体的でもあるニュアンスを内包していて、日本語の「郷土」と「故郷」両方がその訳語にあてられてきたのである。したがって、「郷土」と「故郷」をここでは分けることなく、等しく「ハイマート」の訳語として考えていく。

ただし、「郷土」という言葉の方は、特にドイツから入ってきた「郷土芸術」や「郷土教育」という新しい思潮で用いられ、そうしたニュアンスで定着したと考えられる。無論、「郷土」という言葉は教育勅語でも用いられていたが、もともとあった概念が西洋近代化以降に再定義され、新しい意味合いを加えていったといえるだろう。

ことに明治から大正、昭和にかけて、日本で西洋近代化や都市化に対する反動から地方や土着のものへの関心がたかまり、伝統の再発見がなされているなかで、「郷土」という概念が意味をもつようになった。だが、この「郷土」がドイツからきた「ハイマート」という概念の受け皿になったように、この西洋近代化への「反動」、あるいは日本回帰自体がある意味で「西洋的」だったともいえる。近代と反近代のせめぎあいの中で、やがて日本も世界大戦へ巻き込まれていく。国民国家形成のために「民族」や「文化」が利用されたように、「郷土」ももてはやされていく。むろん、この土着へ帰れ、というスローガン自体は決して非政治的なものではなかったのである。

「郷土」概念を考える際には、したがって成田の「故郷」概念の考察のポイントにあるように、歴史的変遷と人間存在のアイデンティティ補償という側面、そして都市化との関連¹⁰をみることに特に重要であると考えられるだろう。

⁹ 『國文学』第53巻、前掲書、S.28

¹⁰ 参考、柳田国男「故郷異郷」、『明治大正史 世相篇』中央公論社新社、

2. 郷土芸術・郷土文学、郷土研究、郷土教育

2-1 郷土文学

まず「郷土芸術・郷土文学」Heimatkunst は文学の方面ではもっぱら Heimatdichtung（郷土文学）の意味で用いられていた。いわゆる「郷土芸能」や「郷土玩具」などのことを直接は指していないが、この郷土芸術・郷土文学運動が西洋から入ってきたことが従来の意味での「郷土芸能」などを活性化させ、再発見させたということも考えられるだろう。

文学事典でみると（集英社『世界文学大事典』）、ドイツ語の Heimatdichtung の訳語で、一般には郷土に根差し、その風物や文化、生活を描く文学を差し、ヘーベル、ゴットヘルフ、ヘラー、シュトルム、ラーベが先駆者である。しかし、郷土文学が問題になってくるのは、19世紀後半、産業革命による経済的社会的変化に伴い種種矛盾の現れるなかで、近代化の流れに対して、地方的・郷土的なものが独特の意味を帯びて打ち出されていくときであるので、自ずと郷土芸術（Heimatkunst）に結びついていく。これは反動的で近代化と都市文明を憎悪するものだった。アードルフ・バルテルスとフリードリヒ・リーンハルトらの郷土芸術運動は農村を都会文明の退廃に、特にベルリンに対置し、農民を民族の生命力の根源とみなし、ドイツ的本質の再生を求めた。第一次世界大戦後にはナチズムの「血と土の文学」につながっていった。また、第二次世界大戦後はトーマス・ベルンハルトが農村を現代の病の鬱積する場とみて、郷土幻視破壊を目指す文学にとって逆説的に新しいモチーフともなった、とされている。¹¹

このように、ドイツで19世末にすでにあった農村や田舎を取り上げた郷土文学が産業化・近代化の中で生まれた郷土芸術運動によって反近代、反都市のニュアンスを付け加えて展開され、さらに民族主義的な国家理念形成に利用されたのが「郷土文学」である。

2001年（初出1931年）柳田国男と国家／郷土との関連について論じたものとして、伊藤幹治『柳田国男と文化ナショナリズム』岩波書店、2002年がある。それによると、「郷土と『クニ』とネイションという概念は微妙にからみあっている」（S.47）という。

¹¹ 『世界文学大事典』第5巻、事項、集英社、1996年、S.211

日本において、この「郷土文学」はまずは「郷土芸術」として紹介されている。文学上の「郷土芸術」はまず片山正雄（孤村）の紹介からである。『帝国文学』に「郷土芸術論」を書いている。フリードリヒ・リーンハルトの論文「新理想」（1901年）によりながら、都会中心の近代の文学に対して郷土、すなわちその民族 Stamm とその自然を取り上げ、詩化しようとしたとしている。そして、この郷土への愛着、民族性をドイツ人の種族的、地方的感情、すなわち郷土的感情に富む文学によく表れているとし、郷土芸術の民族性を強調している。またこの点が単なる「田園文学」より進歩している点であるともしている。¹² さらに、全人類においても一種の「郷愁」がある、人類の故郷すなわち「自然」であるとして、自然から遠ざかり文明の弊に苦しむがゆえに人間は故郷なる自然を慕う、だから文明を産出した民族は必ず一種の郷土芸術を持っているとしている。¹³

また、彼はのちに『岩波講座 世界文学』で、現代文学の諸傾向のせめぎあいでも混沌を極めている 1930年代において新しい芸術として「新郷土芸術」があるのではないかと述べており、彼が郷土芸術に期待を寄せていたことがわかる。¹⁴

大正期には生田長江らの『近代文芸十二講』（新潮社、1921年）に、また三井光彌の『独逸文学十二講』（新潮社、1926年）にも「郷土芸術」のことが解説されているが、リーンハルト¹⁵の論を中心したもので、片山の解説に依拠しているとみられる。

昭和期には『岩波講座 世界文学』で立澤剛が「郷土文学」を執筆している。ここではヒトラー批判はドル買い精神を是認することであるとして、郷土文学の目指す民族主義的で反米的な方向性を示している。郷土 Heimat という言葉は「日本語やドイツ語では流石に含蓄の多い情緒の表現ではあるが、英仏に於ては左程に珍重されないでも良い語彙に属するかも知れない」¹⁶として、郷土文

¹² 片山正雄「郷土芸術」、『明治文学全集』第50巻（「片山孤村集」）、筑摩書房、1974年）、S.197（『帝国文学』第12巻第4号～第5号、1906年4月10日、同年5月10日）

¹³ 同書、S.306 f.

¹⁴ 片山正雄「現代文学の諸傾向 評論」、『岩波講座 世界文学』（第11巻、現代文学の諸傾向）岩波書店、1933-34年、S.9 f. なお、「郷土芸術」については、ヤコボースキーの「郷土芸術、二、三の注釈」、平井正編『ベルリン 世界都市への胎動』国書刊行会、1986年 がある。

¹⁵ Friedrich Liehnart: Heimatkunst. In: Neue Ideale. Stuttgart 1920

¹⁶ 立澤剛「郷土文学」、『岩波講座 世界文学』（第14巻 各種文学）岩

学における日独の親近性と反文明国へのコンプレックスをうかがわせる。ドイツの郷土芸術運動については、これに先立つ時代精神への反感から出発したとする。自然主義の唯物論や世界主義、社会主義、新ロマン主義の芸術至上主義や主観的情緒的貴族趣味や気分とデカダンスへの反動であるとする。彼はまたバルテルスとリーンハルト、ヘルマン・パールの論を紹介し、さらにリーンハルトを長塚節の『土』と比較して、郷土文学の持つ基本気分の楽天観を強調している。¹⁷

また同じく『岩波講座 世界文学』シリーズで成瀬清（無極）の「文学史概説 現代」（第11巻 現代文学の諸傾向）では、文学思潮の推移変遷について有機的関係をなすものとして「反流」という運動も正反対のものではなく、以前のもの内在したり並行したりしたものが優勢になったものと考えられることができるとして、それを同志の関係ではなく、兄弟、父子の関係であるとしている。¹⁸ a) 耽美的・官能主義と b) 神秘的・象徴主義、c) 郷土芸術主義の三つの傾向について、a) が狭義の印象主義で b) c) は新浪漫主義と呼ぶことができる。だが、a) b) は官能・神秘で分離は困難であるが、この二つとも自然主義に含まれていたとする。それに対して「郷土芸術」は新浪漫主義であるが、自然主義とは対立している点で狭義の新浪漫主義とも異なるとして、「郷土芸術の運動に伴って独逸の新古典主義の運動が起こっている」¹⁹という。

成瀬はこのように、「郷土芸術」を自然主義と対立する新ロマン主義的傾向の流れにある運動として文学史的に位置付けている。たしかにドイツでは自然主義と新ロマン主義の境界が曖昧で、その結果、新興芸術の諸潮流が錯綜としてしまってみえるが、ここでは自然主義自体の多面性が引きおこしたドイツ的なアレンジを加えられて展開された運動と位置づけることで、「モデルネ」の全体図の中での「郷土芸術・郷土文学」の位置がよくわかるのではないだろう

波書店、1933年～34年、S. 7

¹⁷ 同書、S.38. なお、このうちヘルマン・パールは、ウィーンの文芸批評家で新ロマン主義を主導した一人だったが、「大都市に抗して」というエッセイで地方や田舎が確かな拠り所にある、として、人種的・土着的なものをもとにして、ヨーロッパをイメージをしている（「確固とした土地に立て、ヨーロッパよ！」）。このきわめて「都会的」で、かつ日本文化にも造詣が深い作家が「田舎」を拠り所にすべきと強く主張していたことは、興味深い。Hermann Bahr: *Gegen die große Stadt*. In: *Essays*. Leipzig 1912, S.201.

¹⁸ 成瀬清（無極）「文学史概説 現代」、『岩波講座 世界文学』（第11巻 現代文学の諸傾向）、1933年～34年、S. 31.

¹⁹ 同書、S.41

か。

山岸光宣の『独逸文学の知識』（1934年）では、ズーデルマンが詳しく紹介されているが、彼が初期において「故郷」によって得た名声が近頃失墜したのは、後に郷土を見捨てたことが大きな原因であると批判している。また、「亜流の文学」として「郷土芸術の運動」を紹介している。「小説の方面に於ては、大都会の頹廢した社会から田園の健全な社会へ転向して、自然主義で鍛え上げた技巧を以て新境地を開拓しようとしたものが、所謂郷土芸術の運動である。此の運動は重大な文化的使命を持つてゐたが、芸術上に偉大な業績を上げることが出来なかった」²⁰すなわち郷土芸術の「文化的使命」は認めるが、力量がそれに伴っていなかった、というのである。

文学事典以外で「郷土芸術・郷土文学」がドイツとの関係で実際に紹介された例は、俳句の雑誌にみつける。明治末に発刊された俳誌『層雲』は、自由律俳句を提唱する主催者の荻原井泉水もドイツ事情に詳しいほか、独文研究者が多数参加していたことは、拙論「ドイツ・ハイクと俳句の再評価」²¹で触れた。この雑誌にはまた「郷土」という言葉がドイツとの関わりで使われていた。たとえば1915年の第五巻3号、4号（6月号、7月号）には「詩作と郷土」という小題のもと、「暁村」（雪山俊夫、ドイツ中世文学研究者）がドイツの作家の詩と散文を翻訳紹介している。第3号には「暁村」によるリード文がある。

「北海の風光 軍艦、飛行船、水雷、水艇—北海は殺気横溢、今正に凄惨なる修羅の巻と化してゐるが吾等はしばし血腥い現実を脱かれ、詩作を通して北海の風光を臚気乍ら髣髴せしめようと思つて拙訳を敢てすることとした」²²

第一次世界大戦当時の北海の情勢が急を告げている時代に、あえて詩を通してその風光を思い浮かべたいという。文明の極致たる世界大戦からの逃避として、反文明社会のシンボルとして、田園風景や海辺ののどかな風光が求められたということだろうか。訳出した詩は、ハンス・ベトゲ「フスウム附近にて」、テオドオル・シュトルム「わが郷土」、グクタアフ・ファルケ「寂しい牡猫」、フレンセン『三友人』の中の「北海」、オスワルトの『ランツウムの少年』より「スルト島にて」である。同じく第4号には「暁村」による「ホルシュタインの曠野 東海（オストゼエ）の島影」とあって、リーリエンクローン「曠野」、

²⁰ 山岸光宣の『独逸文学の知識』非凡閣、1934年、S. 232f.

²¹ 依岡隆児「ドイツ・ハイクと俳句の再評価」、『日本研究』第38巻、国際日本文化研究センター、2008年

²² 『層雲』（復刻版、不二出版、1996年）第5巻3号、S.4.

シュピイルハーゲンの『問題的人物（プロブレマアチッセナツラレン）』より「リュウゲンの島影」、ティム・クレーゲルの『寂しき世界』より「ホルシュタインの曠野」が訳出されている。

いわゆる「郷土芸術」の代表と目されていたフレンセンやティム・クレーゲルもあり、ドイツの「郷土芸術・郷土文学」を移入しようとしていたことがうかがえる。また、日本の俳句がドイツの郷土文学や自然をうたった詩に親近感を抱いていたこと（この点では、ベトゲが日本の俳句のドイツでの紹介者だったことも興味深い）、両者が反文明・反都会、自然への親近性というスタンスを共有していたことがみてとれよう。

2-2 郷土研究

大正から昭和にかけての郷土研究・郷土教育といった民俗学や教育運動の面でも、「郷土」はキーワードとされた。「郷土研究」は柳田の唱えたものだが、これもドイツの *Heimatkunde* をモデルにしていた。1913年発刊の雑誌『郷土研究』がその普及に貢献した。なお、吉野正敏（「ドイツのハイマート・クンデと日本の郷土学に関する若干の考察」）は、1930年代のドイツのハイマート・クンデが教育の中で展開されたことを指摘、ナチズムとの関連を持っていたとしている。だが一方では、日本の郷土学が新渡戸稲造の「地方学」と柳田國男の「田園経済学」と「農村生活誌」による「郷土学」があるとして、柳田自身は実地調査を重んじ、イデオロギーを拒んだとする。そのうえで、日本の郷土学の出発にはドイツのハイマート・クンデの影響はほとんどなかったとみられるとし、高木敏雄が『郷土研究』でドイツ語を使っていたのはアカデミックな印象を与えるためだったとしている。²³ たしかに、彼はドイツのハイマート・クンデを紹介したのは、内田寛一、奈良女子師範学校の小川などがおり、ドイツの動向とこうした日本の動向がまったく無縁だったかどうかについては、不明であるとしているが、日本の郷土学がドイツのハイマート・クンデをそのまま受容したとはいえないまでも、それを意識し、モデルのひとつとしていたことは間違いないだろう。逆に、日本独自の郷土学がドイツのハイマート・クンデと別系統から出ていながら軌を一にしていたとすれば、むしろその同時発生的な動きに時代の志向性が証明されるともいえよう。異文化からの影響は受け

²³ 吉野正敏「ドイツのハイマート・クンデと日本の郷土学に関する若干の考察」、『愛知大学総合郷土研究所紀要』愛知大学総合郷土研究所、第40号、1995年、S. 69

入れる側に素地があって可能となるという観点から見直してみる価値もあるだろう。

『郷土研究』の第1巻第1号(1913年)の高木敏雄による序、「郷土研究の本領」には、「郷土研究の目的は、日本民族の民族生活の凡ての方面の凡ての現象の根本的研究である」²⁴とされる。さらに郷土=民族=日本国家という図式を描き、「吾々は現在の日本を以て、日本民族の郷土とするものである」²⁵と述べている。ただし、この「日本人種」は「主観的概念」²⁶であり、民族の本源地の探究は無意義であるとして、比較研究の必要を説いている。比較の対象はアジアであり、東洋であり、と無限にあるという。郷土は純粋な自然の一部ではない。民族生活の影響を受けた土地であると主張、世界中で日本は例外的に、国家と文化、民族の範囲が一致しているとして、日本民族生活の研究は世界でも理想的なものであるとしている。²⁷

また、小山田通敏の『日本郷土学』(1940年)では、新渡戸稲造が提唱した「郷土会」を継承し、「郷土思想と国家思想との関連の重要性」²⁸を説き、「科学性」を加味して、時節がら民族自覚のための組織を目指した。また興味深いのは、ここでは満州における国策的な開拓民定住のための「新しい郷土」運動にも寄与しようとしたことである。しかもそれがナチス・ドイツの国策的な居住事業をモデルにしようとしていたのである。特に、日本民族の「血縁と土地」²⁹というときには、ナチスの「血と土」のイデオロギーとの関連がある。この本は、第1章 郷土の科学性、第2章 わが郷土、第3章 新しい郷土 第4章 郷土と教育、第5章 郷土学の樹立とその方法、という章構成であるが、第1章第3節が「ドイツの郷土科学」として、先行するドイツの「郷土学」を紹介している。

ここでは、さらにシュプランガーによるベルリンの科学的郷土学研究会での講演「科学的郷土学の陶冶価値」からの引用があり、ここでいう郷土学の「科学性」の由来が推測される。ドイツでの郷土科学の実践は国家的指導原理として意義を持つとして、「郷土からの分離に対する反動、近代機械労働に倦んだ

²⁴ 『郷土研究』第1巻第1号(1913年3月)、S.2

²⁵ 同書、S.4

²⁶ 同書、S.6

²⁷ 同書、S.11f.

²⁸ 小山田通敏『日本郷土学』日本評論社、1940年、S.12

²⁹ 同書、S.3

慰安の欲求」³⁰が起こる時代において、このドイツの郷土科学は日本の郷土学の科学性の樹立とその実践指標として役に立つ³¹、としている。また、ヨーロッパの郷土学の創設者としてスイスのペスタロッチを挙げている。³²

さらに、第5章の「郷土学の樹立とその方法」では、「総合科学としての郷土学」にあたって、ドイツ文学から地理学に転じた中目覚によってドイツの「ハイマートクンデ（郷土学）」を知り、その萌芽は新渡戸稲造の『農業本論』に見出したとしている。³³その新渡戸の果たせなかった「郷土学」をここでは「日本中央郷土研究所」の設立という形に結実させようとしたのである。この試みがドイツ系の理論とその実践を模範にしていることは明らかである。実際この本の最後では、こう述べられている、「ドイツの国土計画が、『農村共同体としての郷土』をその根基としてあるよやうに、満州国に於て今年度から企画に着手されてゐる国土計画、またわが日本に於ても、企画に着手されようとしてゐる国土計画に於て、当然、郷土がその根基となるべきを思ひ、われわれ郷土学徒は一層その責務の重大なることを痛感する」³⁴こうして、これに先立つ三十年前に萌芽がある「郷土研究」は、戦時下の国土計画や植民地政策において復活し、民族主義的色合いをさらに強めていたのである。

2-3 郷土教育～徳島の事例も含めて

このように、郷土を民族の核として注目するというあり方はドイツからの影響がたぶんにあったといえよう。そればかりか、郷土を教育に結びつけるということも、同じくドイツからの影響だった。

明治30年代から大正期にかけて、郷土科が主張され、教育の「郷土化」が起こった。すでに1891年の教育勅語の小学校教則大綱には地理や日本歴史に「郷土」の語があったが、1908年の内務省の地方改良運動や新渡戸稲造の「郷土会」

(1910年～1919年)、^{じがた}「地方学」(1898年)の提唱があった。こうした流れを受けて1930年には郷土教育運動が展開されたのである。この運動は国体論や日本精神、大政翼賛会へとつながり、「郷土」が軍国主義のなかでやがて「皇国」形成の精神主義的母胎となった。1933年の『郷土教育講演集』は文部省が

³⁰ 同書、S.26

³¹ 同書、S.30

³² 同書、S.51

³³ 同書、S.329

³⁴ 同書、S.344

主催しており、国家主導による教育政策の一環だったが、これが「新教育」に叶うものであり、モデルとされたのが、やはりドイツだったのである。その中の、吉田熊次「教育学上より観たる郷土教育」では、郷土教育とは、文部省が全国に奨励する初めての新教育³⁵であり、郷土教育の本質は「郷土を対象とする教育」³⁶であった。そして、これはドイツでも盛んに唱えられていたし、郷土教育という言葉はドイツ語にしかない。Heimaterziehung、実際は、Heimat-Schule という語が多く使われたが、これは「郷土学校」のことであり、新教育で言われている Lebens-Schule ということになる。生活主義の教育を施すのが「レーベンスシューレ」で、具体的な生活に即した郷土教育は一種の新教育、新学校である。「ボーデンステンデツヒ bodenständig」な教育、すなわち具体的なドイツ人の生存して居るその国土に即した教育を指していたとされる。³⁷さらに、森岡常蔵「郷土教育に対する所感」では、郷土教育は近年特に世界大戦後に盛んになっているようだが、この傾向は特にドイツに多いように思われる。1927年に小学校の規定改定で、教授の郷土的原則が唱えられ、「ボーデンステンデヒカイト」、と教科目の相互連絡関係が強調された。世界大戦後の国民に郷土を愛する念を強める必要を感じたということが基礎にあったと想像する。特にドイツやオーストリアは戦争で不利な位置に立った国で国民に対して殊に郷土を愛する念を喚起する必要が感ぜられたから、ドイツ、オーストリアで教育の郷土化の考えが盛んになったのではないかと述べられている。³⁸また、ここでは教育学者のライがハイマート・クンデは原則であり、学科目ではないと言ったのに対して、森岡は、原則だから学科目でないといった問題の出し方が間違っているとして、これを学科目とすべきだと主張している。³⁹郷土教育を文部省で考えたのは、「要するに従来の如き形式的な抽象的な教育に流れずに実際生活に切実なる教育を施して行く意味で、ひっきょう有為の国民を作りたいと云ふ本意に外ならないものであります」⁴⁰としている。この文部省主導の郷土教育運動がドイツの動向を強く意識していたことは明らかだろう。

³⁵ 文部省普通学務局郷土教育連盟編『郷土教育講演集』刀江書院、1933年、S.7

³⁶ 同書、S.8

³⁷ 同書、S.8f.

³⁸ 同書、S.47f.

³⁹ 同書、S.52

⁴⁰ 同書、S.53

また、具体的に当時の徳島を例にとると、徳島県女子師範学校・徳島県立徳島高等女学校『郷土教育紀要』第1輯（1935年）には、「序」で「昭和5、6年の此郷土教育思潮並にその実地の機運が勃興しかけて来た折柄、文部省は全国の師範学校に対し、郷土教育資料蒐集費として数千円宛の金額を交付された。この一事は郷土教育の振興に預つて力があつたのである」⁴¹として、本校職員の調査研究に成る業績とされる。当時師範学校に対して郷土教育推進のために交付金が出されていたことがわかる。さらに、国民学校レベルでもたとえば、上八万国民学校の『郷土教育資料』では著者の桂が、「最初は『地誌』として編纂にかかつたのであるが、途中から時日の制約があつて（中略）『郷土教育資料』としてつづつてみた」としてから、「皇国民錬成を目標とする国民学校の教育は換言すれば健全なる愛郷心所有者の錬成に外ならない。而して之の營為たるや郷土を真に理解することに培ふ健全なる愛郷心所有者の錬成を手段とせねばならぬ。健全なる愛郷心のみ健全なる愛郷心の端本たり得る」⁴²と述べている。ちなみに、この資料の目次は、1 本村の沿革、2 位地区画、3 人口、4 職業、5 土地、6 産業、7 交通、8 神社仏閣、9 教育、10 警察郵便貯金、11 衛生、12 地誌、13 史跡、14 伝説、15 忠勇美談、16 年中行事、17 郷土芸術、後に、となっている。このように、地方では文部省主導でまずは師範学校から国民学校へと徐々に郷土教育を浸透させていったことがわかる。

この運動は戦後にも社会科の教材として受け継がれていた。徳島師範学校郷土研究編『私たちの郷土—徳島県—』（1950年）⁴³でも社会科の教材として師範学校が編集している。さらにその後も岸本実『わが郷土 徳島県』（社会科郷土シリーズ）（1949年）⁴⁴など、文部省教育局の肝入りで編纂された各地の郷土シリーズが定着していったのである。「郷土」という言葉はやがて「ふるさと」というより心情的でソフトな言葉におきかえられていくとはいえ、戦後日本におけるこうした「郷土／故郷」概念への抵抗のなさは、現代ドイツ人にある戦前・戦中における記憶と結びつく「ハイマート」概念に対する批判的態度に比べると、少なからず目をひく。

郷土研究とその超地域的側面については、民俗学の佐藤健二は、概念として

⁴¹ 徳島県女子師範学校・徳島県立徳島高等女学校『郷土教育紀要』第1輯、1935年、S.1

⁴² 上八万国民学校『郷土教育資料』、1941年、「後に」

⁴³ 徳島師範学校郷土研究編『私たちの郷土—徳島県—』実業教科書株式会社、1950年

⁴⁴ 岸本実『わが郷土 徳島県』（社会科郷土シリーズ）清水書院、1949年

の「郷土」そのものを歴史的に考察している。「郷土」という概念は、「『郷土研究』という1910年代の新語を構成する重要な要素として、初期の民俗学の発想のなかに浸透していった」⁴⁵とみている。また、「郷土教育」の方は教育界の流行となった1930年代に「郷土」が社会的に注目されはじめるとともに、その意味するところも乱雑に膨らんでいった。むろん、その際にはドイツにおける「ハイマート」の流行があるとして、こうした「郷土」概念の複合的な展開を再考する必要がある、としている。⁴⁶佐藤はここでは柳田國男の講演「郷土研究と郷土教育」を取り上げ、「郷土研究」を「郷土」を研究するのではな

くて「郷土」で、あるものを研究するものだとする。「郷土」概念が偏狭で他の地域との比較検討もない独りよがり、閉じた地域研究自体が目的化するような傾向への批判が込められていたといえよう。

ただ、佐藤の述べるように「郷土」が「明確に言語化されていない日常であり、無意識であり、身体であり、知識や経験の根拠地である」⁴⁷がゆえに、これを比較の作業によってその村にだけ通用するものを越えていこうとすべきであるし、佐藤本人も述べているように、比較の枠は国民国家の内側に留めねばならない理由もない⁴⁸のだが、この郷土概念のあいまいさ自体がナショナリスティックな言説に取り込まれていく要因であったことも事実だろう。当のドイツ本国で「ハイマート（郷土）」概念がナチスの「血と土」のイデオロギーに取り込まれていったばかりか、日本でも1910年の『郷土研究』においてすでに、これは民族・国民国家の研究に収れんしていくとされていた。以上のことも踏まえれば、「郷土」概念自体がもともときわめて民族主義的な志向性と排他性を持っていたといえるかもしれない。「ハイマート」を好んで歌ったドイツ・ロマン派がきわめて愛国的で民族主義的な下地を持っていたのと同様に、日本においても軍国主義の流れの中で「郷土」が総動員されていったことは忘れるべきではないだろう。

したがって、問題は「郷土」概念からナショナリスティックな要素を腑分けして取り出して見せることというより、「ハイマート（郷土）」がナショナル

⁴⁵ 佐藤健二「郷土」、小松和彦・関一敏編『新しい民俗学へ』せりか書房、2002年、S.311

⁴⁶ 同書、S.311f.

⁴⁷ 同書、S.321

⁴⁸ 同書、S.318

なものに向かうのがアイデンティティの補償のためであること、そして「ハイマート（郷土）」が担ってきたアイデンティティの補償の機能を認めつつ、そこから「ハイマート（郷土）」を相対化する視点をいかに手に入れるかということであるだろう。

そこで本論では次に、「ハイマートロス」というあり方を試みに取り上げ、この「郷土」概念の相対化のヒントを得たいと思う。

3. ハイマートロス「故郷喪失」：「ハイマート」の相対化に向けて

3-1 ハイマートロスと日本近代

都市はハイマートといえるのだろうか？あるいはハイマート＝故郷は、そもそも故郷喪失を前提としているのではないか？つまり、生まれながらに都市生活者だったものには、あるべき原風景としての「郷土・故郷」が欠けている。にもかかわらずその「郷土・故郷」の実感を持ちたいと思っているようである。それは大都市の風景、下町の風情でもよいと考える人もいるが、やはり多くの都市民に刷り込まれた郷土のイメージは山河のある自然に彩られた風景であろう。なぜか？つまりそれは自らに物理的にも確かなよりどころを与えたいという極めて主観的なアイデンティティの要請だからなのではないか。それは、都市の流動性に対してどっしりと動かない不変の土地につながりたいという太古からの人間の願望である。もしそうだとすれば、このアイデンティティの補償が満たされぬかぎり、都市が「郷土・故郷」になることもないのではないか。

物理的に「ハイマート＝郷土/故郷」を取り戻せないとしたらどうするか？記憶と想起との関わりで言えば、想起の中にしか故郷はたち現れてこない。地理的空間としての「ハイマート」・生まれ育った土地という物理的場所と言うだけでは必ずしも言い切れない主観的側面があるはずだ。これは公のステレオタイプ化された故郷のイメージとは異なる自分の内面のイメージであるはずである。それに至ろうとすると過去のことを想起するという、現在の立場からのとらえなおしが自ずと不可欠となる。ところが、現代においてはこの想起が目指す原風景としての記憶の場を持たない人々が多くなってきた。そして、この「原風景」が人工的に作りだされていったのである。ここに政治的操作が入る余地があったはずである。

このように、ハイマートが主観的イメージであり、それゆえ政治の面でも、民族主義的な「土」に基づくイデオロギーの動きにたやすく取り込まれていっ

たとはいえるが、他方でその主観性をドイツとの関連で民族や国家ではないより普遍的なものへむすびつけようとする試みもあった。たとえば、日本ではヘッセの文学受容に、この「心のハイマートふるさと」を求めるというモチーフが多く認められる。また、ヘッセの『ペーター・カーメンチント』は佐藤晃一訳も高橋健二訳も『郷愁』と意識されていた⁴⁹ことにも、こうした日本の受容の特色が現れているだろう。

ヘッセは読書について、各人の内面にある世界性への欲求に導かれて読むことだと言っている。すなわち、人間にはそれぞれ他者と異なっている、人間普遍的な「精神の聖堂」への思いは共有している。それがあから、一見異質に見える文化やまったく異なるタイプの間にも惹かれるのである。世界にはたくさんの文化があるのに、それでもある種の「世界性」があり、そこにはどんな辺地からであってもつながっていくことが可能である。だから彼は、自分の内面にあるそうした欲求＝「気に入ったもの」に導かれていくうちにやがていつかは必ず「世界性」へたどり着くのだ、と考えたのである。

彼はさらに、この人間普遍的なものとは、人類が原初にすでに失った「故郷」である、とする。すなわち、人間をこの普遍的で世界的なものへ導いていくものは故郷への思い、「懐郷心」なのである。ヘッセをこの「懐郷」の詩人としてとらえた日本人に佐古純一郎がいる。彼は故郷徳島と母への思いを、ヘッセ体験と重ねている。佐古は『ヘルマン・ヘッセの文学』⁵⁰の中で、こうしたヘッセの中に母への思い、故郷への思いを読み取り、自分がヘッセに強く引かれる理由もそこに見ていたが、まさしく、ヘッセの文学が現代日本人の内面にもある「懐郷心」に触れてくるのである。

ハイデッガー哲学の日本受容もこの精神的・主観的帰郷というモチーフの点で意外とたやすかったのかもしれない。⁵¹想起が人類の深い記憶の層への立ち

⁴⁹ ヘルマン・ヘッセ『郷愁』の原題は“Peter Camenzind”である。岡田朝雄・リンケ珠子『ドイツ文学案内』（朝日出版社、2000年）によると、この作品の翻訳は28種類でているが、そのうち、関泰祐訳『青春彷徨』（岩波文庫、1937年）、山下肇訳『青春彷徨』（筑摩書房、1960年）、同（潮出版社、1971年）、同（現代教養文庫、1977年）、石中象治訳『ペーター・カーメンチント』（ユマニテ書園、1937年）の5篇を除く、23篇が『郷愁』と意識している。

⁵⁰ 佐古純一郎『ヘルマン・ヘッセの文学』朝文社、1992年

⁵¹ 参照、ハイデッガーによるヘルダーリンの詩「帰郷」「追想」の解釈。Martin Heidegger: Erläuterungen zu Hölderlins Dichtung. Zweite unveränderte Auflage. Vittorio Klostermann 1951. ハイデッガー『ヘルダーリンの詩の解

返りであり、それが哲学であるという西洋哲学の考え方は、たしかに物理的境界を越えて、排他的になることを免れた郷土観を提示していたかもしれない。

また、片山敏彦は独文学者にしてロマン・ロラン研究家、そして自身も詩人だったが、戦時下にあつて「魂の聖堂」において敵対する国の人々同士がつながりうることを思い描いていた。⁵²

「たしかにわれわれは、愛にもとづく追憶を通じて自分の現在の魂を富ませている。いったい魂とはなんだろうか？それは追憶にほかならないのではあるまいか？魂の成長とは、追憶の自己洗練に他ならないのではあるまいか？認識とはつねに回想である、とギリシャの思想家は言ったが、このこと自体が、ギリシャよりもさらに古い思想の回想ではなかったか？ドイツ語の *sich erinnern* 『回想』という字が『自己を自己の内部へ向ける』という字であることは興味ぶかい。初めから、われわれ人間の内部にいつさいが在ったし、今もあるではないか？『神はお前の内に在る』と言われている。人間的尊厳のいつさいの思想的根拠もこのことにあるのではないか？（中略）この春の予表が私にグルックの『オルフェオ』を思わせた。この身動きするかすかな希望が悲歌の調子を持っているのは、生命への待望がたくさんの死の追憶そのものから生まれているためだ。私はオルフィズムのギリシャのことを再び考えた。これは私にはいつまでも、幼時に母に抱かれて初めて海を見たときの遠い記憶に結びつく」⁵³

この片山のあまりに西洋的ヒューマニスティックな「回想」論は、戦争で敵国者同士となった者同士の間でも魂の「故郷」での照応（コレスポンダンス）が可能なのだというハイマート（郷土）観に通じていた。「雲は他郷をさまよふ者に故郷を想わせ、故郷の土の上で仰ぎ見る者に他郷へのさまよひを想わせる」⁵⁴だが、こうした見方は、一部の知識人には通じたが戦時下の一般の人々の間には十分に浸透したとはいえない。

こうした人間存在の根源へとさかのぼろうとする詩的な、あるいはあまりに形而上学的な郷土観はたしかに試みられ、今でもエリート的受容はあるだろうが、それが現実の国際政治の世界では無力であつた、いや、それがときに消極

明』（『ハイデッガー選集』Ⅲ）理想社、1950年

⁵² 片山敏彦「魂のよろこび」（1955年）、『魂のよろこび』に収載、『片山敏彦著作集』第8巻、みすず書房、1972年

⁵³ 片山敏彦「村里日記」、同書、S.80f.

⁵⁴ 片山敏彦「雲の旅」、同書、S.6

的に現状肯定するように機能したことがあったことは否定できない。

小林秀雄が「故郷を失った文学」（『文藝春秋』、1933年）を書いたとき、自らが生まれてから故郷というものをもっていないと述べ、故郷を懐かしがることのできる人をうらやむ一方で、その状況を日本の近代が抱える宿命として受け入れるという態度を示した。頭で理解する郷土ではなく、やはり彼は物理的で実体のある故郷/郷土をできれば持ちたかったのだろう。それがかなわないということ認め、開き直ってそのことをある種のよりどころにしたのである。そこにはハイマートロス（ハイマート）にするという覚悟のようなものが読み取れる。

徳島で幼少期を過ごした中野好夫も「ハイマートロス」という言葉を使い、自らの生い立ちについて述べている。「わたしやわたしたち一家が徳島県の人たち（中略）から受けた芳情は、いまもって忘れ難い。にもかかわらず、どこまで徳島の地に同化しえたかとなると、やはり疑問である。いまにして思うと、少なくともわたしの場合、結局は他所者（よそもの）としての十五年余ではなかったのか。もっと適切に言えば、『故郷知らず（ハイマートロス）』の人間としての十五年でなかったのか」⁵⁵ 英文学者で翻訳家、批評家であった中野好夫は、二歳から十六歳までの人格形成期を徳島で過ごしている。引用は彼の自伝的なエッセイであり、明治から大正にかけての自らの幼少期における徳島の思い出を語っている。管理主義的だった旧制徳島中学を放校になったことや同窓の賀川豊彦との出会い、城山公園でドイツ人俘虜たちからサッカーを習った話、「伊賀町の異人さん」モラエスが学友に英語を教えてくれた話などは、興味深い。

だが、彼は徳島を「故郷」と呼ぶにはいささか抵抗があったようである。中野の徳島に対する印象は、遊芸の伝統がある「スタイル」を持った町というのと、「よくいえばおっとりとした町、悪くいえば進取積極の気にはむしろ乏しい、なにか静かによどんだような町」⁵⁶ というものだった。徳島への思いは、複雑なものようである。それはなぜなのだろうか？

小林秀雄が「故郷を失った文学」で、近代化を追求してきた日本では結局は足元の具体的な生活が見捨てられ、生活が極めて抽象的なものとなり、地に足

⁵⁵ 中野好夫『主人公のいない自伝—ある城下市での回想』、筑摩書房、1985年、S.11

⁵⁶ 同書、S.16

をつけた人間が見られなくなったとして、そうした近代人の一人としての自らの文学をも「故郷を失った文学」と評したのは、彼が東京生まれの都会人であったこともその要因だろう。饗庭孝によれば、小林は不安な「抽象人」としての自覚を持ちながら、「東京人」と開き直り、文学世界の実質的な生の展開に自らのより所を求めたということである。⁵⁷だが、たとえ地方に生まれていたとしても、この近代化の時代、ひと一倍西洋に憧れ、身近な文化を疎んじた中野も、「故郷を失った」境遇は同じであり、こうした「抽象人」の一人だったともいえるだろう。

ところが、終戦直後、その中野が「地方文化の意義」というエッセイを発表している。そこでは、「単なる都市文化の浅薄な模倣でなく、地方自体の特質の上に立った強力な文化」を郷土人の中から育成すべきだと主張していた。戦後、戦争協力を反省し、平和運動や辛口の社会批判を続けた彼は、その後この「地方文化」という「中央」を相対化する視点を戦後一貫して持ち続けたともいえる。彼は地方性に戦後の新しい文化の可能性を見ようとしていた知識人の典型といえるだろう。

中野は西洋文学に志すなかで、かえって日本の近代化の皮相さを味わってきた。と同時に、それが実質のないものと見えるのは、まさに自分たちが西洋や中央の文化にかぶれて、足元の文化を省みなかったためと思えた。その結果として、戦時中に国家に絡めとられていた自分たちの文化の脆弱さが、戦争を通して身にしみて感じられたはずである。「地方」で生活していた頃には思いもよらなかった風物・文化を再発見していった戦後の中野は、現実には近代化の波にもまれて見失っていた自分たち世代の「故郷」を、せめて文学のなかで、遅まきながら取り戻そうとしたのではないだろうか。その意味では、この「自伝」は遅れてきた「近代人」による心の故郷への里帰りだったのである。

中野はここで、このように自分たち知識人が戦時中に戦争に加担したのは、西洋かぶれで拠り所をなくしたためであったと総括しているのだが、ただ「郷土」や「地方」という概念が戦前・戦中において反西洋文明的とはいえ、近代的な民族主義的イデオロギーとして使われていたということに関しては無反省のようである。彼の地域性の主張も図式的で、どこか「抽象的」に響くのは、そのためなのかもしれない。

3-2 ハイマートロスとディアスポラ

⁵⁷ 饗庭孝男『小林秀雄とその時代』小沢書店、1997年、S.9

小林秀雄が、ハイマートロスがハイマートであるというところから近代日本人は出発せざるを得ないと考えたとすれば、それは現代でいう「ディアスポラ」文学にもつながるのではないだろうか。多和田葉子のエッセイ「生い立ちという虚構」（『カタコトのうわごと』、1999年）では、生まれ育った東京、国立は故郷なのかと問い、そこになつかしいという感想は持てない、と述べている。国立のことを書こうとすると、すぐ嘘を書いてしまう。架空の町のような。〈東京〉はただの言葉にすぎない、と。⁵⁸都会生まれの現代日本人にとって、東京はハイマートとは言えない。しかし、小林秀雄と違って、だから寂しいとは彼女は言わない。

多和田はそのままドイツへ旅立ち、違う言葉の地で生活することを選ぶ。日本語が一度くずれていく場所が必要だったと述べている。こうした境界に生きることを自発的に選択したことを、彼女は「エクソフォニー」＝母語の外に出ることと名付ける。言葉と言葉、文化と文化の境界にある「溝」のようなところにとどまりたいという。⁵⁹それは、そうした「ディアスポラ」的あり方を選んだ現代的ハイマートロスの人間にとっての新しい「故郷」とも言えるのかもしれない。

多和田葉子・^{ソキョウシク}徐京植『ソウルーベルリン玉突き書簡 境界線上の対話』（2008年）には、こうした「ディアスポラ」的あり方ゆえに、逆にドイツ人のハイマートへのこだわりが当初理解しがたかったことが述べられている。

（多和田）「わたしも外国に移住した人間ですが、どこに帰ったらいいのか分からないから寂しいという気持ちを持ったことはありません。帰るという発想がないのです。それなのにドイツ人はよく、『あなたはハイマートを失ってしまったのではないのか』と心配してくれます。それがなぜなのか、わたしはもう何年も前からずっと気になっていました。故郷をあらわす『ハイマート』という言葉はナチスの時代に悪用されたために、『祖国』という言葉と同じく嫌な味わいがあります。ドイツ人が外国人のハイマート喪失に同情するのは、『自分の国に早く帰ればいいのか』というような外国人を排斥する気持ちの表れにすぎないではないかと思って、わたしはこれまで大変批判的でした」⁶⁰

⁵⁸ 多和田葉子「生い立ちという虚構」、『カタコトのうわごと』青土社、1999年、S. 31

⁵⁹ 同書、S.34f.

⁶⁰ 多和田葉子・徐京植『ソウルーベルリン玉突き書簡 境界線上の対話』岩波書店、2008年、S. 163

かし、戦後の引揚者の映画を見て、理解することになる。それは、ダンツイヒからドイツに移住し、故郷を失う経験をした男性のインタビューだった。「追い出された彼らに共通しているのは、自分の故郷は奪われただけでなく、故郷はもう存在しない、という思いです」⁶¹として、「『あなたは故郷を失ってしまったのではないか』とわたしたちの状況を心配してくれるドイツ人の多くはそういう歴史を抱えているわけです。自分がそういう体験をしてきたから、今の移民を助けたいという人もいれば、移民として苦勞した自分がせつかく築きあげたものを更に新しい移民によって奪われたくないとって排他的になる人もいるわけですが、少なくとも『定住者』対『移民』という構図ではなく、古い移民と新移民の利益が対立するという構図がわたしにやっと見えてきた気がします」⁶²

ドイツ人にとって「ハイマート」という概念⁶³が担う意味が、多和田には奇異に思えたのが、その歴史的側面を理解することによって別のハイマート観に気づくことになった。その「古い移民と新移民」の対立という構図は、「定住」ということを前提とせず、絶えず移動し続ける状態がノーマルであり、移民/定住民の問題はある歴史的時点での切り取り方の問題だというニュアンスがあるだろう。

ドイツとの関連で「ディアスポラ」という言葉を使った人として、国際政治学者の姜尚中^{カンサンジュン}がいる。自伝『在日』によると、西ドイツに留学して、ギリシア出身のガストアルバイターの家庭の出の仲間と知り合い、「ディアスポラ」というあり方に目覚めた。そして帰国後、自らが東アジアの共存のために自分の在日としての「ディアスポラ」的存在が意味を持つのではないかというように考えるようになった、という。⁶⁴ディアスポラとしての存在を肯定的に意識した点で、多和田と共通点を持つだろう。

⁶¹ 同書、S.165

⁶² 同書、S.166

⁶³ ドイツ人にとってのハイマート概念については、宇和川耕一「故郷（ハイマート）の射程～ドイツにおけるディスクールを通じて」、愛媛大学法文学部人文学学科編『愛媛大学法文学部論集』第22巻、2007年。高橋英寿「記憶と空間：西ドイツにおける『故郷（ハイマート）』の変遷」、関学西洋史研究会『関学西洋史論集』第29巻、2006年 を参照

⁶⁴ 姜尚中『在日』講談社、2004年

小田実も 1980 年代に西ベルリンで生活した体験を持つ。⁶⁵そのときに生まれた娘は、在日朝鮮人の伴侶が生んだ子だった。このときに改めて国境の存在を痛感し、ハイマートの感覚を相対化するきっかけを得たといえる。

このようにハイマートを最初から持たないと意識する作家たちが、そのハイマートロスな存在を現代の文化的・社会的状況において積極的に創造的な意義を持ちうると主張する一方で、具体的なハイマートを常に意識しながら、物理的には帰郷がかなわないとしても内面的にはつながっていくというあり方で、かえって物理的境界を越えていくというあり方もある。むしろ、こうした出自とのつながりを維持したまま新しい文化・社会で創造的な働きをするという方が本来の意味での「ディアスポラ」といえるかもしれない。⁶⁶

ギュンター・グラスは戦争で故郷ダンツィヒを追われた「東方難民」のひとりとして「故郷喪失者」となった作家である。そのグラスが 1978 年に二週間、日本を旅行した。そのとき大江健三郎と対談し、特に「地域性」ということを話題にしている。二人の作家に共通する「ハイマート（故郷）」にこだわって創作をする意味を、「周縁性」「地域性」が世界につながるという観点で取り上げ、現代文学の可能性を論じている。

大江健三郎との対談「文学と戦争体験—地域性の力」（『海』1978 年）では、こうグラスは述べている。

「私の出身地は、今日ではポーランド領となった旧ドイツのダンツィヒでして、しかも郊外のヴァイクセルという河の河口のあたりの地方で、私は作家としてそこから完全に離れることはないと思います。（中略）私は、文学の場は大都市ばかりではないし、中央志向、大都市志向というものは、文学の障害にさえなることもあると思う。アメリカについて言いますと、地域的特殊性を知らなければ、今日のあの尖鋭化された人種問題も理解できない」⁶⁷

文学は具体的な地域に根差しているもので、それは必ずしも地方だけにかぎらず、大都市であってもかまわないし、また実際大都市から文学の新しい潮流が生じたことも否定できない。だが大都市だけでしか文学が生まれないとしたらそれは文学の障害になる、というのである。その意味で二人の作家がハイマ

⁶⁵ 小田実「『子供代々』の国での歴史と政治の『体現』の誕生」、『西ベルリンで見たこと 日本で考えたこと』毎日新聞社、1988 年

⁶⁶ 参考、戴エイカ『多文化主義とディアスポラ』明石書店、1999 年

⁶⁷ ギュンター・グラス、大江健三郎「文学と戦争体験—地域性の力」、『海』1978 年 5 月、S. 314

ートである「地方」にこだわったことは世界文学的に裾野を広げたということができる。ただ、大江がここで文化人類学の道化理論を援用して、文学における「周縁性」の力をもっぱら問題にしたことに、グラスは違和感を感じていたと思われる。グラスは多くの場合、むしろ文学は大都市で生まれ、地方はその後追いをしてきたということを指摘している。都市がなくて周縁・地方だけでは新しい文学は生まれえないというわけである。都市中心の文学を相対化する地方からの文学の存在価値を認めつつ、近代文学が都市中心であるという事実は否定しないのである。

むしろ、グラスの論点は都市か地方かという対立ではなく、ハイマートの地が現実に失われているということ、そしてその喪失という状況から具体的な想像力を発揮させる可能性を引き出しているということである。むしろ、それはグラスが故郷ダンツィヒから追い出された東方難民のひとりだったということから来る。ハイマートロス（ハイマート）を運命づけられたがゆえにハイマートにこだわる。そしてそれが結果的に田舎を描くことになった。そこにはハイマートロスがスプリングボードになって世界文学へつながっていくという現代文学の在り方を確かに示唆している。この点については、グラスがのちに「喪失について」という講演で、故郷喪失者であるがゆえに国境というものにとらわれずに現実を広くとらえ、創造ができたということ述べていることが参考になるだろう。

68

さらに、グラスと大江健三郎との二度目の対談「ドイツと日本の同時代—多様性・経験・文学」（『群像』1991年1月）では、グラスは四国の森の中の故郷を舞台にした『万延元年のフットボール』を読んだことについて、述べている、

「私はその小説（大江の『万延元年のフットボール』）を読みまして、ほとんど自分のふるさとの小説のような気がしました。異質な感じが全くしなかったわけです。その意味で、文学が二つの世界をつなげている感じがします。文学というのは、非常に正確な言葉で描かれているものであるならば、どんなに田舎の文化を描いても、両方の文化をつなげることができるわけです」⁶⁹

この日独二人の作家は周縁の地を文学の舞台に選んだから通じ合えるのではない、田舎であろうと都市であろうとそれを丹念に正確に描くということが文化の境界を超えと言っているのである。むしろ、「正確に」描くことができるのは、生まれ故郷にずっととどまっているのではかえって難しい。それをい

⁶⁸ Günter Grass: Rede vom Verlust. In: Für- und Widerworte. Göttingen 1999, S.87.

⁶⁹ ギュンター・グラス、大江健三郎「ドイツと日本の同時代—多様性・経験・文学」、『群像』1991年1月、S. 295

ったん、離れて見返すというまなざしで相対化することで初めて可能なのだろう。その意味では、現代の「郷土文学」はこうしたハイマートを、あえてディアスポラ的立場に身を置くことで相対化するというところにこそ存在価値があるといえるのではないだろうか。ちなみに、大江との交遊で知られるエドワード・サイードは自らの「故国喪失」性を「エグザイル」と呼んでいた。20世紀はまさにこの「故国喪失者」たちが活躍した時代だったとしてから、こう述べている。

「『全世界』を外国として見ることで、独創性あふれるヴィジョンができあがるだろう。ほとんどの人間は原則として、ひとつの文化、ひとつの環境、ひとつの故郷しか意識していない。エグザイルは少なくともふたつのものを意識する。そしてこのヴィジョンの複数性から生まれるのが、同時存在という次元に対する意識—音楽からの用語を借りるなら—対位法的意識なのだ」⁷⁰

グラス、大江、サイードら現代の作家たちは、それぞれの用語を用いているがきわめて類似性のある、現代における「ハイマート」との関係のあり方を指し示していると言えるのではないだろうか。

おわりに

以上、「ハイマート」概念の近代日本における変遷をドイツの関係を中心にみてきた。「郷土芸術・郷土文学」はドイツから入ってきた新しい概念だったが、これがたとえば自由律俳句などの日本の文学に潜在していた「ハイマート」感覚に触れて、それを発現させていったと考えられる。ところが、これは狭い地域性を意味するばかりではなく、「民族」「国家」を意識していた。これが「郷土研究」や「郷土教育」においてもドイツ的な民族主義をベースにした近代国家形成に大きな役割を果たすこととなったと考えられる。一方で、近代化によって土地から離れ、都市生活の中で自らの存在が抽象化されたと感じた作家たちは、かたや代用としての「故郷」を文学に求め、かたや都市にこそ「ハイマート」を見ようとした。戦後にはさらに、故郷喪失（ハイマートロス）を自明のこととして、あるいはより創造的な機能を果たしうる状態として受け入れ、新しい創造世界を切り開いていく作家たちが現れたのである。

しかし他方で、地域の問題を論じる際にはハイマート（郷土/故郷）概念の無批判な使用がよくみられる。そこにはむしろアイデンティティの拠り所を求

⁷⁰ エドワード・W・サイード『故国喪失についての省察1』みすず書房、2006年、S.192f.

める近代人の宿命的衝動が潜んでいるとはいえるのだが、今後は、ともすれば狭い血縁的で民族主義的關係に自閉しがちなこうした傾向を内省し、いかにこの概念を普遍的なものに鍛えあげていくべきかを問うべきであろう。いたずらに都市や近代性、異郷と対立させても、それは所詮「反動」でしかない。むしろ、それらの対立が実はより普遍的な価値を支えるコインの裏表であったことを見直し、アドルノの『ミニマ・モラリア』に言うように、あえて「ハイマート」にいて寛がず、異郷にあって「ハイマート」を見る心構えが求められているのではないだろうか。

なお、ハイマート概念と近代性、特にナショナリズムとの関連をさらに考えていくために、植民地下におけるハイマート概念の展開などについても調べてみる価値があるだろうが、それは今後の課題としたい。